

平成22年 6月 10日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19320024

研究課題名（和文） 近代西欧に於ける「ラファエッロ以前」問題の研究

研究課題名（英文） “Pre-Raffaello” problem in the European modern painting.

研究代表者

喜多崎 親 (KITAZAKI CHIKASHI)

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授

研究者番号：90204883

研究成果の概要（和文）：19世紀の前半にドイツのナザレ派、フランスの宗教画刷新運動、イギリスのラファエル前派など、絵画に於いてラファエッロ以前を強く意識した運動が各国で起こった。これらは相互に関係を持ち、ラファエッロ以前、すなわち盛期ルネサンスよりも前の絵画様式への回帰を謳ってはいたが、一律に同じ様式を採用するという結果にはならなかった。それは各国の民族的文化への意識や、近代への意識が微妙に関係していたためである。

研究成果の概要（英文）： In the first half of the 19th century, the movements clearly conscious of the painting style before Raphael occurred in some main areas of Europe, as the Nazarene of the German artists, reformation of religious paintings in France, and the Pre-Raphaelite Brotherhood in England. Though they shared their insistence on returning to the primitive style, meaning a style before the High Renaissance, and had connections with each other, they didn't choose the same style. That is because they became aware of their own culture as identity and modern art.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	6,600,000	1,980,000	8,580,000
2008年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2009年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
年度			
年度			
総計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：近代美術史

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：(1)ラファエッロ (2)プリミティヴ (3)ラファエル前派 (4)中世回帰
(5) デューラー (6)フラ・アンジェリコ (7) ナザレ派

1. 研究開始当初の背景

1800年代のドイツに於けるナザレ派、1830年代から盛んになるフランスに於ける宗教画刷新運動、1848年に結成されたイギリスのラファエル前派兄弟団等、19世紀の前半にヨ

ーロッパ各地で少しずつ時期をずらしながら発生した「ラファエッロ以前」の様式への回帰という現象は、もちろん個別問題としてはこれまでもそれぞれの国の美術史の枠組みの中で行われてきた。しかしながらその活

動に共通する過去様式の模倣という点は、それぞれの運動にとって非常に本質的であるにもかかわらず、オリジナリティを重視する近代美術の文脈の中では、必ずしも十分な調査研究が行われてきたとはいえない。また、それが扱われる場合も、グループ結成の状況や個々の芸術家の個人的な影響関係といった言説に留まっていることが少なくない。だが、近年の芸術作品に関する研究では、オリジナリティの神話を見直し、社会的構築物として作品を考察することが常識となっており、この問題にも当然そうした視点からの検討が必要になっている。更に、近代美術史を抽象に至る主題排除の経過と捉えるモダニズム的發展史観に基づく歴史記述に於いては、これらの運動がそもそも宗教画を中心とする歴史画のものであったこともこれらが軽視される結果に繋がったが、むしろ意味内容と様式選択との間に意識的な関係を構築しようとしている点で、この動きは近代美術史を捉え直す上で重要な性格を有しているといえる。

また、この問題は所謂プリミティブなものへの着目という、近代美術の大きな問題とも関わっている。「初期的・原始的」なものを意味するプリミティブという概念は、近代美術史に於いては、特に民衆の造形やアフリカ・オセアニアの造形を語る枠組みとして用いられると同時に、盛期ルネサンス以降に対比された、イタリアの初期ルネサンスや北方ルネサンスを指す言葉としても用いられている。自分達とは異なる文化によって作り出された造形に対する「美術作品」としての評価は、美術の美的要素が歴史的に構築されたものであることを示すのみならず、アヴァンギャルドの展開にとって大きな意味を持ったが、同じ概念で捉えられる初期ルネサンスや北方ルネサンスに対する価値付けは、今日的な評価でいえばむしろアカデミズムの中で展開しており、アカデミズムとアヴァンギャルドを単純に対比する近代美術の枠組みを覆す可能性を持っている。

2. 研究の目的

19世紀の西欧の美術・建築に於いては、しばしば「歴史主義」といわれるような過去の様式の意識的模倣が行われた。これは単にある芸術家が個人的に過去の特定の巨匠を手本とする、あるいはその影響を受けるというレヴェルの問題ではなく、社会的に構築される時代の意識や、美術作品の機能といった点から考察されるべき現象である。本研究はその中でも特に、ドイツに於けるナザレ派、フランスに於ける宗教画刷新運動、イギリスのラファエル前派、といった19世紀の前半にドイツ、フランス、イギリスに於いて並行して発生した「ラファエッロ以前への回帰」と

いう現象を中心として、「ラファエッロ以前」という様式認識の内実、各国に於けるその時代的必然性、更に異なる文脈から生まれた各国の運動相互の関係・差異等を明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

まず主要な研究対象がドイツ、フランス、イギリスの近代美術であるため、それぞれを専門分野とする研究者をメンバーとし、そこで起こったことを綿密に調査する。研究者は、ドイツ（尾関）とフランス（喜多崎）が各1名、イギリスに関しては世紀中頃と世紀末と世代が2世代に亘るため2名（山口、堀川）を当てた。また近代が過去を如何に見たかという問題の性質上、対象となるイタリア（松原）とドイツ（佐藤）の15世紀を専門とする研究者2人にも参加を要請した。初年度は、夏に各連携研究者（初年度は研究分担者扱い）が、それぞれの分野に関わるこれまでの研究状況について纏め、研究報告会を通してメンバー全員が共通認識を持つことから始めた。もちろん当研究に関わる最低限の知識は既に共有されているが、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアといった地理的広がりや、ルネサンスと近代という時間的広がりを持つ研究の性格上、最新の研究成果をふまえた相互の情報交換は必須であった。

特に本研究では、書籍等で良質の図版が豊富に紹介されるといったことがないジャンルである上、図版では確認できない周囲の状況や作品の材質感といった要素も研究に重要な意味を持ちうるために、研究に関わる全員が毎年、写真撮影と文献収集を中心とする海外調査を行った。

初年度を含め3年間、年度末には必ずその年の研究報告会を開催したが、これは単に各研究者が研究の内容を報告し知見を共有するに留まらず、各ジャンルの研究者が自明として見過ごしてきた問題の再検討や、他国・他分野の状況との比較、他のジャンルの方法的視点が研究のヒントになるといった点で大変有意義であった。

また、各自研究の過程でラファエッロ以前の美術を評価する言説の収集に努めることとし、集約の上資料として共有することを目指した。

4. 研究成果

この研究を開始するに当たって共有されていた基本的な知識は以下のようなものであった。すなわち、ラファエッロ以前の様式への回帰は、ウィーンのアカデミズムに反撥したフリードリヒ・オーヴァーベックやペーター・フォン・コルネリウス等ドイツの若い画家達が1808年にローマで所謂ナザレ派と呼ばれるグループを形成して活動を始めた

のが早く、フランスではその影響を受けつつ、王政復古後のカトリック復興運動の中で、宗教画を刷新するための手段としてイポリット・フランドラン等に選択され、イギリスでは漸く 1848 年になって、やはりロイヤル・アカデミーの古典主義に飽き足らなかったダンテ・ガブリエル・ロセッティやジョン・エヴァレット・ミレイ等が、ナザレ派やフランスの影響を受けながら、「ラファエル前派兄弟団」を結成した。

そしてその際、最大の問題は、独仏英の動きが実際には連動しながら、それぞれの国に於いて展開された美術の様式は、かなり異なっているという事実であった。三年間に各研究者が達成した成果を纏めると以下のようになる。

(1) ドイツ出身でローマで活動したナザレ派に於いては、ラファエッロ以前への回帰は、むしろラファエッロの初期と自国の 15 世紀の画家アルブレヒト・デューラーの存在を中心として展開した。尾関による報告では、イタリアとゲルマニアという民族的文化意識がラファエッロとデューラーによって体现され、両者は対比されつつもその融合が目指され、そのマニフェストと解せる図像も生み出されたこと、またこの対比はまだ統一前のゲルマン国家への愛国的傾向と結びついており、ドイツに於いては諸国の成立した中世の君主にまつわるエピソードを主題とする傾向が強く出ていたことが明らかにされた。

(2) フランスでは、19 世紀の初め頃から始まるイタリア・プリミティヴ絵画への興味が、1830 年代に宗教画の刷新運動の中に取り込まれ、批評家アレクシス・フランソワ・リオなどによって異教的な盛期ルネサンスよりも宗教画を描くスタイルにふさわしいものとして認識されたこと、中でも 15 世紀のフラ・アンジェリコが規範として認識されるに至ったことが既存の研究によって指摘されていた。しかしそこには、何故中世へ回帰しなかったのかという問題が残されていた。喜多崎による報告では、リオのテキストの読み直しや、これまで等閑に付されていたフラ・アンジェリコ様式の評価の変遷の綿密な追跡などにより、当時宗教画にふさわしい様式が中世ではなくフラ・アンジェリコになった背景に、彼の絵画が持つ再現性の未熟さが精神性と結びつけられたのみならず、背景に古代ギリシア美術を規範とする古典主義的美学が依然として横たわっていたこと、またそうした理論上の帰結はともかくとして、実際にはフラ・アンジェリコ様式の採用は限られ、現代美術としては批判されたこと、聖堂装飾の現場ではむしろ 15 世紀以前の中世の様式も次第に採用されていたことなどが確認された。

(3) イギリスのラファエル前派兄弟団の画

家達の画風は、その名前に明らかなように意識としてはイタリア・プリミティヴ絵画への傾倒を極めて強く打ち出しながら、実際の絵画の様式は、必ずしも後者に似たものではなかった。この問題に関しては、これまでも指摘されてはいたが、その理由の解明は必ずしも明確ではなかった。山口による報告では、イギリスに於けるイタリア・プリミティヴ美術の再評価の経緯を辿り、ラファエル前派が登場する背景を明らかにすることで、ラファエッロ以前の様式と細部に亘る写実的描写という本来一致しない様式的特徴が、プリミティヴィズムという枠組みによって接続すること、この運動の理論的支柱となったラスキンの批評を綿密に読み解くことによって、「自然」をキーワードにラファエッロ風の理想主義からの脱却が写実主義と連動し、結果としてイタリア・プリミティヴの様式から乖離していくか、そして兄弟団結成当時のホルマン・ハント、ジョン=エヴァレット・ミレイ、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの作品に於いて、それぞれ何が当時イタリア・プリミティヴを想起させたかが明らかにされた。

(4) ラファエル前派兄弟団はやがて自然消滅するが、世紀末には特にロセッティの影響のもとにウィリアム・モリスやエドワード・バーン=ジョーンズの活動があり、第二次ラファエル前派などと呼ばれている。堀川は、第一次ラファエル前派のラファエッロ以前への回帰が特定の画家の様式を具体的に示さなかったのに対し、この第二次ラファエル前派では特にバーン=ジョーンズによってポッティチェルリが強く意識されたこと、そしてそれはラスキンによるこの画家の再発見に先んじるものであったことを明らかにした。また、こうしたラファエッロ以前への回帰の意識が世紀末になってむしろテンペラ技法の復興と繋がるというこれまで殆ど知られていない動きを発掘した。この動きは、単なる過去の技法や新たなテクスチャーへの着目に留まらず、倫理的、すなわち油彩画の再現性に対比される精神性と結びつけられた点でフランスのフラ・アンジェリコ評価と類似する点があり、第三の「ラファエル前派」としても位置づけられる。

(5) ナザレ派に於いては、初期ラファエッロとともにデューラーの評価が高かったが、佐藤は、デューラーを特別視し、その様式を模倣するデューラー復興という現象が、ナザレ派以前に如何に認められるかを報告した。ドイツでは、デューラー復興の動きは 16 世紀以来繰り返し認められるが、特に着目すべきは、16 世紀のイギリスの宮廷画家であるニコラス・ヒリアードに対する影響で、これは時代的・地域的な限定はあるものの、デューラー様式が規範として機能した可能性を示

峻し、ナザレ派がラファエッロとデューラーを対比した背景を説明すると共に、ナザレ派の活動を相対化するものとして評価される。

(6) イタリアに於けるイタリア・プリミティヴへの興味と再評価は、これまであまり知られていないが、近年次第に着目され始めた。松原はまず、16世紀イタリア、特にシエナに於いて、中世のイコンが明らかに様式的な差異がある新たなタベルナクルム(櫃)に收容される例や、破損した中世のイコンが修復される際に必ずしも新しい様式で覆われなかった例などを通じて、特別に聖性を認められたと考えられることを報告した。また19世紀イタリアに於けるラファエッロ以前への回帰として、民族意識を背景にした「純粹主義」と呼ばれる美術運動があったことを報告した。特に松原が紹介したアントニオ・ピアンキーニの純粹主義のマニフェスト(1842年)は、リオと同様盛期ルネサンスの作品を拒絶するのみならず、特にチマブーエとその時代を賞賛している点で、他国の状況と一線を画している。

これらの研究成果を総括すれば、以下のようになる。

(1) ラファエッロ以前という概念そのものが、アカデミズムの規範としてのラファエッロからの脱却という否定的概念であり、特にある様式を選択するものではなかった。それが各国の状況を反映して大きな差異を生む原因になったと考えられる。

(2) 従ってラファエッロ以前への回帰という現象は、ドイツやイタリアなど分裂国家に於いては、背景にかなり強い民族的意識があったが、統一国家であったフランスやイギリスではむしろ古典主義批判としてのみ機能していた。

(3) それまで規範ではなかった過去様式を模倣するという行為は、新しい美術運動として認識される一方で、規範からの逸脱のみならず、近代的でないという理由から批判されたように、その後のアヴァン=ギャルドの展開にとって反面教師としての役割を果たした。ナザレ派の活動はドイツに戻ってむしろアカデミズムを形成し、フランスの宗教画刷新運動は始めからアカデミズムの枠内で展開した。これに対して、イギリスのラファエル前派は、世紀末にこそアカデミズムに吸収される感があるが、写実主義として、アヴァン=ギャルド的性質を強く持っていたことも特記される。

猶、本研究を通して「ラファエッロ以前の美術」に関する言説が70ほど収集され、資料として翻訳されて纏められているため、各研究者の論考とこのアンソロジーとを併せて、何らかの形で刊行することを目指している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 松原知生、都市と絵画の防衛機制——ジョルジョ・ディ・ジョヴァンニとシエナ戦争、デアルテ、査読有、No. 26、2010年(近刊・掲載決定)
- ② 山口恵里子、ラファエル前派兄弟団におけるプリミティヴィズム——19世紀英国の「ラファエッロ以前」問題、論叢 現代語・現代文化、査読有、No.4、2010年、97-155頁
- ③ 喜多崎親、聖なる未熟——19世紀フランスに於けるフラ・アンジュリコ受容、言語社会、査読無、No. 4、2010年、215-238頁
- ④ 喜多崎親、様式選択の聖と俗——二項対立からの逸脱、西洋美術研究、査読有、No.15、2009年、100-116頁
- ⑤ 喜多崎親、ミュシャ《ジスモンダ》とビザンティン、ユリイカ、査読無、2009年、152-163頁
- ⑥ 尾関 幸、フィリップ・オットー・ルンゲ《ナイチンゲールの稽古》——魂の教育者としてのプシュケ、大学美術教育学会誌、査読無、No. 42、2009年、79-86頁

[学会発表] (計2件)

- ① 松原知生、「都市と絵画の防衛機制——ジョルジョ・ディ・ジョヴァンニとシエナ戦争」、第80回九州藝術学会、2009年7月4日、福岡市美術館講堂
- ② 山口恵里子、「ラスキンの「手」の教育——触れることと見ること」、筑波英語教育学会、2007年6月17日、筑波大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

喜多崎 親 (KITAZAKI CHIKASHI)
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：90204883

(2) 連携研究者

山口 恵里子 (YAMAGUCHI ERIKO)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：20292493
(H19：研究分担者)
尾関 幸 (OZEKI MIYUKI)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：10361552
(H19：研究分担者)

松原 知生 (MATSUBARA TOMOO)

西南学院大学・文学部・講師

研究者番号：20412546

(H19：研究分担者)

佐藤 直樹 (SATO NAOKI)

国立西洋美術館・学芸課・主任研究員

研究者番号：60260006

(H19：研究分担者)

堀川 麗子 (HORIKAWA REIKO)

愛国学院大学・人間文化学部・講師

研究者番号：70406792

(H19：研究分担者)